平成25年10月1日発行　第44巻 第10号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊
地域保健

10
2013

●特集
生活習慣病の重症化を防ぐ

●フロントランナー
永見道枝さん《防府市 健康福祉部 子育て支援課 主幹・こども相談室長》

●ピープル
冠地 情さん《東京都成人発達障害当事者会「イイトコサガシ」代表》

FRONT RUNNER
フロントランナー

山口県
防府市

永見道枝さん

防府市役所 健康福祉部 子育て支援課主幹・こども相談室長

児童虐待事案の適正対応には多職種互助・連携が欠かせない

何があろうと泣かない・焦らない・あきらめない！

文：髙田英弦（医療記者）　写真：カミヤス セイ

防府（ほうふ）市は山口県の中南部にある。南は瀬戸内海の周防灘に面し、東は周南市、北と西は山口市に接している。人口は1985（昭和60）年以降11万8000人前後で推移し、知名度は下関や萩ほど高くないが、昭和に入るまでは製塩業で栄えた。臨海部は近年マツダやブリヂストン、協和発酵バイオなどの大規模工場の進出に伴い、新たな産業振興が図られている。

一方、内陸部には昔ながらの風情をとどめる所が点在する。防府駅から北へ10分ほど歩くと山陽道に出合い、東に折れて少し進むと左に鳥居が見えてくる。参道の奥、石段の先に防府天満宮がある。小高い天神山の緑に覆われ、静かで穏やかな時空を擁している。

創建は904（延喜4）年。全国にあまたある天満宮の先駆けとされる。来年で満1110歳になる天神さんは防府の歴史そのものと言える。この地の繁栄・安全の寄る辺となり、万人の暮らしを見守ってきた。

しかし今日の防府は、東京や大阪といった大都市と同様の経済・社会問題に直面している。2008（平成20）年9月に生じた、米国投資銀行の破綻（リーマンショック）による影響も免れなかった。市内の工場は生産・雇用調整を余儀なくされ、深刻な景気悪化・失業問題に見舞われた。医療・健康・福祉課題も山積し、待ったなしの対応を迫られている。

●

永見道枝さんは半世紀にわたり防府市に住まい、30年近く同市の保健行政に尽力してきたフロントランナー。郷土の地域・母子保健、高齢者福祉にかかわり、現在は子育て支援課・こども相談室で奮闘を続けている。

「女性にも資格が必要」祖母の助言が進路開く

永見さんは、自営業に携わる両親が

特集

生活習慣病の重症化を防ぐ

健康日本21（第二次）では、基本的な方向として「主要な生活習慣病の発症予防と重症化予防の徹底」が盛り込まれた。今後は特定健診・特定保健指導の推進とともに、発症後の受療促進などにより血管障害の進行をできるだけ食い止める取り組みがより強く求められる。今月の特集では、重症化予防の考え方の整理をはじめとして、今年度から始まる戦略研究の紹介、自治体における具体的な取り組み事例を報告する。

P12 健康日本21（第二次）における生活習慣病の重症化予防の考え方
◎岡村智教（慶應義塾大学医学部）

P16 平成25年度から実施される「生活習慣病重症化予防のための戦略研究」について
◎磯 博康（大阪大学大学院医学系研究科）

P24 データを踏まえた個別のアプローチで循環器系疾患・腎疾患を予防
《北九州市の取り組み》
◎丹田智美（北九州市八幡西区役所）

P32 「顔が見える」健康対策・地域に合った重症化予防を目指して
《伊豆の国市の取り組み》
◎取材　逸村弘美（ライター）

人の心にすっと寄り添える保健師を目指して

地域で長く人にかかわりたい

宮崎麻帆（みやざき あさほ）さん
●神戸市保健福祉局
高齢福祉部介護保険課

文＝逸村弘美（ライター）　写真＝C .Kent

「今日はよろしくお願いします！」

宮崎さんの笑顔はパアッと明るく大輪の花が咲いたよう。初々しさの中にも安定した芯の強さ、たくましさが伝わってきます。

宮崎さんが働いている神戸市は、9つの区からなる人口150万人の政令指定都市。洗練された市街地から、少し行けば瀬戸内海や六甲山があるという、都市の機能的な面と自然環境の良さを併せ持つ美しいまちです。淡路島で生まれ育った宮崎さんは、子どものころから神戸が憧れの地でした。

「淡路島でのんびり暮らしていて、大学でこっちに来るまでは電車に乗ったこともありませんでした（笑）。今、こうして神戸で働いていることが夢みたいです」と、ほほ笑む宮崎さん。

そんな彼女が保健師を目指したのは、中学・高校時代に陸上競技部に入ったことがきっかけだそうです。

陸上競技で気がついた生活習慣の大切さ

陸上競技部では長距離走をやっていました。道具を使わないスポーツなので、いわば自分の体がすべて。良い記録を出すためには体の調整や管理が大事であることを学びます。

「良い筋肉をつくるためには、良い食事や睡眠をとることが大事。自分の体と向き合っているうちに、生活のあり方が人の体にすごく影響していることが分かりました。生活を管理することによって自分で健康的な体がつくれるなんて面白いなと思い、そこから健康づくりに興味が出てきたのです」

漠然と、「将来は人の健康づくりにかかわる仕事に就きたい」と思い始めた宮崎さん。進路を決めるときに職業ガイドブックで保健師を知り、「これだ！」と思ったそうです。病気になってからではなく、病気で苦しむ前に予防して、人々に健康的な生活を提案できるところに強い魅力を感じました。

その後、保健師を目指して神戸大学医学部保健学科の看護学専攻に進み、猛勉強の日々を送ります。一番の思い出は、大学3年生のときの4カ月に及ぶ病棟実習。

▲「ここが私のいる神戸市役所です」

▲「できない＝ダメと思わず、できるようになりたいと思う」。その前向きさが武器

「日中はデータからアセスメントして看護計画を立てて実施するという看護の基本を体験し、夜は自宅で遅くまで記録整理や勉強をしました。もう毎日が必死。それでも技術がついていかず、先輩から『対象者の気持ちや状況が分かってない』と叱られて。自分が情けなくて、病棟から出た後に泣いてしまうこともありました。でも、辞めたいと思ったことは一度もなかった。周りにいた人が、大変な状況でも前向きにしっかりと進む同級生ばかりだったので、心強かったですね」

卒業後の進路は、神戸市の保健師を目指します。その理由は、神戸市が子どものころからの憧れのまちだったことと、政令指定都市なので、県と市のどちらの仕事も経験でき、幅広く総合的な保健師活動ができそうなこと。また、病院や企業といった限られた中ではなく、地域という広いエリアで長く人にかかわっていきたいという強い思いがあったからです。

宮崎さんは難関を突破して神戸市に入り、東灘区役所の保健福祉部こども家庭支援課に配属されました。

高学歴でキャリアのあるお母さんたちに相手にされず…

こども家庭支援課は、地域に住む子どもとその親が安心・安全に暮らせるように支援するところ。具体的な事業は、ハイリスク妊婦・新生児の訪問や乳幼児健診、発達障害の疑いのある幼児対象の発達フォロー教室、虐待のリスクを抱えている親を対象としたカウンセリング、また母子手帳の交付など、多岐にわたっていました。地区担当制もあるので、自分の担当地区の家庭も訪問します。

しかし、そこで宮崎さんは最初の壁にぶつかってしまいました。訪問する地区のお母さんたちに自分の話を聞いてもらえないのです。

『訪問に行くと『うちは結構です』という感じで。担当地区は高学歴でキャリアのあるお母さんたちが多く、育児に関してもよく勉強されています。勉強の浅い新人の保健師がオドオド行っても相手にされるはずがありません」